

二 21世紀に向けて伝える

1. 三輪神社の年間行事

年末年始

大晦日おおひろひの午後十一時頃、宮総代によって境内に積み上げられた大篝火おほひかりに点火されます。火が勢いよく燃える頃、拝殿から境内へ階段へ参道へ大鳥居へ国道脇なつとの信号付近まで参拝者の列がながります。午前零時、新しい年の始めを告げる太鼓の音を合図に、歳旦祭さいたんまつりが行われ、参拝者たちによる神鈴の音、柏手の音かしわてが続く、過ぎし年の感謝と来る年の幸せを祈ります。境内広場で参拝祈願の御神酒をいただいて参道の階段を下りると、三輪商店振興会の接待所で「ぜんざい」などの無料サービスがあります。平成十年には前年暮れに再発足した三輪青年団員たちが三輪会館前で威勢良く餅つきを披露。紅白の餅を配りました。

茅の輪くぐり

六月三十日の午後七時に、茅の輪くぐりの神事が執り行われます。六月むつきの夏越なつこしの祓いで、災厄を祓う庶民信仰の一つです。茅の葦あしで直径二尺ほどの輪にして神主がお祓いをしてまずくぐり、参拝者が続きます。神事が終わると茅葦を競って抜き取って持ち帰り、家々の門口に輪にして吊つるします。茅の輪にちなんで智慧の輪として頭に巻く風習もあります。現在は夏祭りの前日に総代全員の手により心を込めて製作され、七月八日午後七時からくぐる事ができます。



御旅所から神社までの提灯行列

けになっています。

夏祭り当日は、子供たちが午後七時頃に提灯ちようどんを手に御旅所ごりょじょに集まり、天狗てんぐ、ひよっとこ、おかめを先頭に笛、太鼓が祇園ぎん囃子はやしとともに三輪通りを練って、神社境内へ向かいます。拝殿では獅子舞が奉納されます。奉納の順序は、荒神あらい祓はらい、剣の舞、刀の舞、振るい獅子てんぐ、天狗獅子てんぐ、牡丹獅子ぼたん、人形獅子、神楽舞の八種類です。

秋祭り

三輪神社の秋祭りは、三田天満神社の秋祭りと並んで、北摂三田の二大秋祭りとして親しまれています。三輪神社社記によると、「毎年九月九日（旧暦）ヲ以テ神事ヲ修ス」とありますが、現在は新暦の十月九日に行われています。

祭りの一カ月前になると、祭りの役付けを決定し、子供御輿等の準備が始まります。九月下旬には区と婦人会によって御

宮ごもり

毎年七月一日に三輪神社の拝殿で、年の後半の豊作や家内安全を祈願して宮ごもりが行われます。現在では三輪十五組、十六組と桶屋町だけになりました。各組ごとに宮司からお祓いをしてもらい、その後拝殿で直会をします。出席者は各家の当主で、昔はその年の米の出来具合などについて宮さんに籠もって夜遅くまで話し合ったということです。現在では、組の連絡事項や世間話等で、一、二時間で終わっています。

夏祭り

毎年七月八日の夏祭りの三週間前から、神楽保存会の人たちによって獅子舞の練習が始まります。このとき、獅子頭の振り動作、足の運び方、二人で舞うとき前後の合わせ方、笛との調和など伝統芸能のいろいろな技を磨きます。

以前は青年会が夏秋の二回にわたって祭の宵宮には獅子舞が各家庭をまわり、祝儀の額によっていろいろな芸を披露していましたが、現在各戸まわりは秋祭だ

幣づくり、十月一日には太鼓の乗り手や神楽保存会によって太鼓と神楽の練習が始まります。

宵宮の八日に神楽保存会による獅子舞が氏子の各家を回り、「荒神祓い」を行います。また区の役員などによって、社境内で御輿、三輪会館横では太鼓の組立の準備が進められます。また幟立て、境内の清掃、砂敷きを行い、子供会役員によって子供御輿の組み立て、このほか表通りの各組では道路に御神灯の提灯立てをします。神社では宵宮祭が執り行われます。

九日の本宮当日では、まず、午前五時三十分頃から各組長など二十数名によって壇尻が組み立てられます。三輪区の壇尻は、地家と町に一基ずつあり、どちらも赤色の三段重ねのふとん太鼓です。太鼓の組立は、伝統を受け継いでいる経験者の指導で始まります。まず本体に取り付けた太鼓の綱を締め直します。次に四本の柱を立て、天井の枠をはめ込みます。続いて三枚のふとん枠を積み上げ、白いタスキで飾り、ふとんの上の中心にトンボと呼ばれる二本の結び目を立てます。さらに

本体の前後左右に二本ずつ、合計八本の担い棒をボルトで取り付けます。最後に太鼓の水引幕、柱幕、吊り提灯を次々と飾り付けて出来上がりです。

午前九時頃、神殿では宮司と宮総代、関係区長等によって神事が執り行われ、午前十時頃には桶屋町の曳き壇尻が社務所前に到着します。ほぼそれと同時に三輪会館では二十数名からなる年番会議が開かれ、当日の壇尻巡行の注意点などが確認されます。

拝殿では、これから巡行する御輿に御神霊が移されると、神楽保存会によって「荒神祓い」が奉納され、次いで社務所前の各子供御輿、太鼓、壇尻の前で獅子舞が運行の無事を祈願します。総年番長のかけ声で午前十時三十分巡行が始まります。巡行の順序は次のとおりです。

桶屋町の曳き壇尻を先頭に、町の太鼓、地家の太鼓、男子の子供御輿、女子の子供御輿が続きます。次いで長老の持つ猿田彦▽社名幟▽毛槍▽お稚児（小三）



御旅所での神楽の奉納

▽宮司、神官▽祭員（白衣総代）▽御三役（区長、総代会長、副総代会長）▽総代（六名）▽お箱（小三）▽鉾・太鼓（小四）▽大金幣▽大弓▽小弓▽小金幣▽金幣▽銀幣▽白幣（以上一歳〜小三）▽櫛（生後百日〜一歳）▽総代二名と行列が続き、最後に御神輿という総勢二百数十人の道中です。

この道中のいわれは、三輪の祭神が年に一回秋祭りのとき御輿に乗って、氏子の暮らしを見て回られるという古来からの伝承によるものです。

社務所前を出発するとき、町と地家の太鼓が、「トリーリマセー」とかけ声をかけ、乗り手が威勢良く太鼓を叩き始めます。どちらの太鼓の乗り手も小学四年生の男児で、ふとん太鼓の中央にある太鼓を取り囲むように四人が座って、太鼓で拍子をとります。この「トリーリマセー」というのは、「これから壇尻を担ぎますよ」という前触れのときに使われます。

囃子のかげ声や太鼓の叩き方は、秋祭りの壇尻運行のときに、かき手が足並みを揃えたり、拍子を合わせるための呼びかけで、とても大事な役割を果たしています。囃子方は、町と地家の二基の壇尻とも同じです。

縦棒と横棒を四方で担ぐ氏子たちは約三十五人。いよいよ壇尻をかき上げるときには「サツサ、ヨイヨイ、アーヨイヤセー」といいます。四隅の棒がかき上がって壇尻が水平になったときには「ヤツサ、ヤツサ」のかげ声になります。神社前の信号機の所では「サーシマセー」とそれまで肩でかいていたのを、両手を伸ばして壇尻を差し上げ、氣勢を上げます。

総勢百数十人のかき手によって、三輪本通りを「サツサ、ヨイヨイ」のかげ声で練り歩きます。神分踏切から桶屋町など狭いところを通るときには、みんな気をつけるようにという意味をもった「エーエーラ、オーオラ、エラサツサ」。万年橋を過ぎ、新町の中程になると道幅も広まり、車瀬橋の詰めで小休止します。ここは三輪神社氏子の最南端にあたるところで、車瀬橋ではまず桶屋町の壇尻が宮入のときのように橋の上を駆け回り、続いて町と地家の壇尻が橋の中央付近まで行き、「サーシマセー」と両手を伸ばして壇尻を差し上げ、やがて神社に向かって同じ道を引き返します。

このとき御輿は、武庫川堤防沿いに相生橋付近まで行き、そこで折り返し、中道を通って、通称三角のところから都市計画道路を通って御旅所に向かいます。太鼓や行列は午後十二時十五分頃、再びJR神分踏切北の御旅所に到着し、ここで壇



三輪神社秋祭りの宮入

尻や太鼓の人たちは昼食に帰ります。しかし、御輿は行列より広い範囲の氏子の道筋を回るので相当遅くなります。

御旅所では御輿台の上に御輿を乗せて神事が行われ、神楽が奉納されます。このときには、荒神舞のあと、天狗やヒヨットコ、お多福が登場して、牡丹の花や杓子、スリコギなど小道具を使って八種類の獅子舞を奉納します。午後二時三十分頃になると行列は御旅所を出発して社務所へ向かいます。このとき太鼓の乗り手は交替します。

曳き壇尻、太鼓、御輿は国道一七六号線から三輪交差点を経て県道後川線に入り、地家を巡行し三輪食堂で折り返します。このときはふとん太鼓の下に台車を入れ、曳いて回ります。神社へ帰って、少し休んだ後、午後四時頃から祭り最大の見物である宮入が行われます。まず、子供御輿が宮入をします。続いて曳き壇尻が神社東の女子坂を上るときには、力が入ります。

桶屋町の曳き壇尻は重さが二ト近くあるともいわれ、自町のひき手だけでは境内まで引き上げられません。このため、三輪の人たちの応援を得て、「チキ、チキ、チン、ドンドン」、「ソーレ」とゆっくりしたかけ声で安全を確かめながら、時間をかけて急坂をのびります。境内まで上がると、そのまま宮入をします。桶屋町の壇尻が三周目に入ったころ「町」、「地家」の順番で社務所前から宮入に向かいます。ふとん太鼓が女子坂にさしかかると

牡丹に唐獅子竹に虎、虎追うて走るは和藤内、

和藤内のお方に知恵貸そか、知恵の中山誓願寺、

誓願寺の和尚さん坊さんで、猫を紙袋にどし込んで、

ボンと蹴りゃニヤンと鳴く、オニヤニヤンのニヤン と囃子ながら狭くて急な坂を上ります。

和藤内というのは、人形浄瑠璃の「国姓爺合戦」の主人公で、明国の再興に活躍した人物だといわれています。

二基の太鼓が境内を練っているとき、最後に御輿が境内に入り、祭りはクライマックスに達します。やがて町と地家の太鼓の競り合いとなり、この間、境内北西に盛り土してあるところを三回まわってくるようになっていきます。この場所には以前に大きな杉の木が一本ありましたが、昭和四十七年頃に枯れてしまったため、杉があつた元の位置に御幣をさし、その名残をとどめています。

「サーシマセー」「サーシマセー」のかけ声と太鼓の音が明神の森に響きわたり、二十分ほどして御輿は神社拝殿に納まります。宮入では「地家の太鼓が先に落とすと凶作になる」というジンクスがあり、町も「商売繁盛」を願って薄暗くなるまで練り合いが続きます。

例年、町の太鼓に続いて地家の太鼓が降ろして、宮入が終わります。このとき「シャン、シャン、シャントコセ」の囃子を速いスピードで鳴らし、太鼓庫の近くで回転します。まるでかき手の労苦をねぎらっているようだといえます。

宮入が終わると、その場ですぐに二基のふとん太鼓は解体されて、本殿東の太鼓庫に収納されます。

氏子総代会長の挨拶があり、大勢の見物人が待ちわびる中、拝殿や石垣の上から境内に向けて約八十五の餅まきがあり、境内での宮入行事はすべて終わります。

午後七時から幣殿で波宇也党の人たちによってハウヤ踊りが奉納されます。(244頁参照)

夜には夜店が十数店、裸電球の元で、おもちゃや菓子類、当て物、食べ物などが売られて賑わいます。午後七時三十分頃、御旅所から神社へ向かって子供会による提灯行列が行われ、夜の部に華を添えます。

午後八時から神楽が奉納されて、十時頃にはすべての行事が終わります。会館では神楽保存会の直会が始まります。

翌十日は各組長たちによって午前中、祭り用具の陰干しをし、午後は後宴があります。

七五三

毎年十一月に入ると七五三行事が行われ、十五日前後の土日曜日には、正装した稚児達で賑わいます。これは、大人の厄年と同様に、三・五・七歳は子供にとって大切な発育の時期で、健全な成長を祈って氏神にお

参りして家族でお祝いをします。

このほか同神社では二月十一日の祈願祭、十一月二十三日の感謝祭には関係者がつどい、神事をおこなっています。

歴代宮司

明治以前の三輪神社の神職は、村人の奉仕によっていたようです。神主を勤めたのは、勢住寺の住職が兼務したとか、御当の当親が一年神主を勤めたとか、三輪六人衆が交替でつとめたとかいわれていますが、いずれも氏名や在職期間等の記録は残っていません。

明治初期の廃仏毀釈のとき以降、現在に至るまで記録に出てくる神職をあげてみると次の通りです。初代から四代までの在職期間は不明で推定年を入れました。参考までに下段に三田天満神社の神職を記しておきます。

三輪神社	三田天満神社
初代 野津甚三郎、幾之祐（明治二年頃）	初代 星崎貞幹（明治七年から十四年）
二代 松田治右衛門（明治六年頃）	二代 村岡某（明治十五年～二十五年）
三代 野津 茂（明治十年頃）	三代 野津某（明治二十五年～二十九年）
四代 野津常勝（明治二十年頃）	四代 神先某（明治二十九年～三十三年）
五代 杉本好穂（明治二十八年～昭和十四年）四十四年間	五代 米谷伝次郎（明治三十三年～）
六代 杉本峻一（昭和十四年～五十三年）三十八年間	六代 米谷清造（昭和十九年～四十四年）
七代 小田文雄（昭和五十三年～）	七代 生田実（昭和四十五年～）

三輪神社初代の神職である野津甚三郎（一説に幾之祐）は、三田藩士で二百石取、「撰津三田図絵」に屋敷が出ています。百姓一揆のとき、郷中より出した要求嘆願書の十四箇条第二項に、「野津甚三郎殿を少参事に任じられたし」とあります。

二代の松田治右衛門は、大歳講の掛銭帳に名前が記録されています。明治六年八月、北州市右衛門赦免願いの中に、下田中村戸長、松田治右衛門の名が見え、十五年に死亡しています。神明庵の墓碑に「空 冠山定翁居士、三輪神社神主」と記

されています。直系は現在、尼崎市内に在住。

ところで、三輪神社には古い祝詞が二十七巻保存されています。その内容は選宮関係が三巻、大祓四巻、秋祭り二巻などで、その他、害虫駆除、病氣平癒、出征兵士の武運長久を祈るものなどです。

このうち神職別にみると、野津茂が一巻、野津常勝が十一巻、杉本好穂が四巻、杉本又市が四巻、杉本亦一が一巻、不明が六巻となっています。このうち又市と亦一は、同じ祝詞の中に記名されていますので、同一人物であることが分かります。又市は後に好穂と称したようです。年号が記されているのは、明治二十九年の元旦祭に杉本又市が記した祝詞だけです。

好穂の履歴書によると、慶応二年（一八六六）八月一八日の生まれで、明治八年四月に三田小学校へ入学、十四年三月に同上等小学科を卒業、その後、五年間、藤井克己について国漢学を修業。二十六歳のとき神道本局から教導職試験補拝命、二十九歳のとき有馬の温泉神社神職。二十八年四月十日から三輪村、三輪神社社掌拝命、三十四歳のとき三田町ノ内三田村、郷社天満神社社掌兼補拝命しています。杉本好穂の父、新兵衛は明治四十二年の没。好穂は昭和十三年十一月、七十三歳、その子峻一は五十九年二月に九十三歳で没。どちらも来迎寺の奥墓に眠っています。好穂の孫は現在神戸市在住。

2 三輪神社とその周辺

天神山と 三輪神社の西北八百歩あたりに天神山があります。山頂に小さな祠があり、西麓を杉谷といい、その北に茶臼山 「巫女ヶ谷」があります。天神山は三輪明神の元宮で、松山氏が今の社地に移し祭る以前は、ここに祭ってあったといわれています。

来迎寺の墓地の西側に茶臼山と呼ばれる、クヌギヤクリなどが生い茂った小さな雑木林がありました。昭和三十七年に三菱電機の敷地を造成したとき、この土が埋め立て用に使われました。この山は円錐型で整った形をしていましたので、古くから古墳があるように伝えられてきました。このため地元の人たちは工事中、何か発掘されるのではないかと、現地へ見

に行きましたが、その形跡はなかったということです。また、この地は茶臼山城の出城ではないかといわれています。いずれにしろ三菱電機の造成には一つの小山が消えてしまうほど土砂が必要だったわけで、削り取ったところは、現在平地になつています。

元宮

丸組内に玉垣に囲まれた六間四方の境内社「森神社」があります。その昔、大きな榎えだが一本ありましたが、枯れて残っていません。地元では「元宮さん」、「藤の森さん」とか、単に「森さん」と呼び、ここが三輪神社の発祥の地だともいわれています。例祭は七月八日午後六時から始まります。

昭和五十八年に荒廃していたこの社を整地、清掃し、玉砂利を敷き詰め、十月八日の深夜神楽を奉納して遷宮祭が執り行われました。祭日は本宮と同日で神殿でのお祭りに先立って行われています。

庚申堂

神社正面の石段西側に小さな祠ほこらの庚申堂こうしんどうがあります。これは勢任寺のもので神仏混淆しんぶつこうごうの頃の唯一の名残です。このお堂は昭和五十五年に社務所が新築されたとき、旧社務所の北東角にあったものを、二層北の現在地に移転してお祭りしています。

祠の中には、青面金剛観音菩薩ぼんざつ木像と五匹の猿が納められています。三匹の猿は木造で「言わざる」、「見ざる」、「聞かざる」で、残り二匹の猿は陶製で股間またもとと頭に手を当てています。これは禁欲と思考を表しているといわれています。

干支曆の庚申かのとまの日を庚申日かのとまひといい、六十日に一回まわってきます。江戸時代にはこの日に村の衆が集会所や庚申堂に集まり、五穀豊穰ごこくほうじやうを祈ったあと、朝まで飲食をしながら世間話をしたそうです。そのときの話は家に帰っても「言わざる」、「聞かざる」、「見ざる」のふりをしなければならないという風習がありました。また、家庭では炒り豆あまを食べ、女子は縫い針を持たず、夜は交接、夜なべ（夜仕事）をしてはならないところもあったようです。起源は中国の道教によると伝えられています。

神社境内に銅製の狛犬が一对ありましたが、昭和十七年に金属回収で供出し、戦後、石造で再建されました。現在石製二体、塗り製一体の計三体あります。

御 旅 所

御旅所は、秋祭りで御輿みこしが巡行するとき、道中が長いので休憩するところとされています。御旅所の道路際にある「御旅所」の石柱は、昭和三年五月に建てられたものです。広場の中央奥にある大きな石は、神事の祭壇のほか、御輿みこしに使われ、神事るときに重要な役割を果たしています。

古記に「高杉村は高杉トテ杉ノ大樹アリ。其ノ所、神ノ御旅所トテ神輿ノ渡御所ナリシカ、此ノ杉カ枯レテ今尚字ニ枯木ノ元ト称セリ。高次村氏子三輪神社ト分離セシヨリ、今ハ御旅所ヲココノ地ニ変更スルニ至レリ」とあります。明治初年に三輪村と高次村が神社を分離したとき、高次字枯木ケ元にあった台石を現在の御旅所に移したものとされています。また、このとき、安永二年（一七七三）巳九月吉日の銘がある「国作尊旅所」の石碑も、神社本殿と神輿庫みこしの間に移されたようです。この石碑は大国主の神を祭ったもので、九鬼の殿様がこの碑の前では下馬し、一札して通られたといわれています。

また、御旅所の玉垣は、いたみが激しくなったため、平成四年に改修されて、九月末に完成。J R「神分踏切」側に平成御大典記念の銘板が建てられています。この踏切は阪鶴鉄道をつける際に参道を横切るので、神に分けていただいたという意味からつけられたものといわれています。

神木と居 三輪神社のご神木は杉の木とされています。とりわけ、稲荷社西にある大杉にはしめ縄がかけられ、ご神木と寺の古道 して崇められています。この杉は地上1・8メートルのところの幹まわりが四・五メートルある巨木です。境内平地の杉

が二・四メートルですので、それと比較すると大きさがわかります。現在鎮守の森には大杉が七十本ほどあります。

区内には杉谷、杉の元など、杉に関する地名も残っており、杉の木との関係も深いようです。また、昭和初期頃まで三輪神社参道の両側には五〜六抱えもある大松や榎が数本ありました。

また、三輪神社から公園内を経て、地家の参道となっている狭い道が、「居寺の古道」と呼ばれています。この山道を北進すると上野へ通じます。昔は街道でした。竹藪たけくさの中に寺跡とみられる平らな敷地が残っています。ここは観音堂といい、一面観音像が祀まつられていました。安政年間の仏像は毘沙門天びしゃもんてん、大日如来だいにちりくわい、不動明王ふどうめいおう、阿彌陀如来あみだだったと伝えられています。



三輪神社下にある「右花山院道」の道標

道しるべ
三輪神社前にある「右花山院 左清水」の道しるべは、もと、大鳥居の前にありました。道路拡幅にもなって

現在の位置に移動されたものです。この碑の側面には「施主大坂他力、世話人仏具屋伊兵衛」「元治二年（一八六五）三月吉日」と文字が刻んであります。「他力」というのは浄土門の信者たちの講を指し、仏具屋伊兵衛の世話で、寄進したものです。道標は、他所から神社へお参りに来た人が三叉路や四辻で道を間違えやすいところに道家内として建てたもので、この標識は花山院と丹波道の清水寺の方向を示しています。

また、三輪神社大鳥居前に「三輪村道路元標」があります。高さ六十五呎、幅二十五呎で石材は花崗岩かこうがんです。大正八年に国の道路法に基づいて各市町村に道路元標を設置することが義務づけられました。町や村の起点・終点の距離を測る位置を示す基本点となるものです。旧有馬郡の町村は県の告示で指定した場所に石柱を建てました。三田町には本町の札場の辻交差点横にも同型の元標が立っています。

天神祭りとは、現在の杉ガ丘は、天神山と呼ばれていました。以前は日本ビラー杉ガ丘寮の西付近に天神を祀る社がありました。大池弁天社べんてんした。この天神は地家の神様で一月と七月にお祭りがあります。杉ガ丘の住宅が造成されたとき、現在の高台に移されました。五組では毎月順番で当番を決め、掃除、洗米や塩などお供えています。七月二十五日の大祭には三輪神社の小田宮司がお祓いをし、五組の人たちが家族連れでお参りし、子供には供物が配られます。このあとサテイ西の農道にある住吉社の大祭に参ります。

大池弁天社べんてんは、城山スポーツセンター下にある大池の奥に祀られています。大池が造られたときに祭られたものと伝えられています。昭和六十年十一月に大池弁天社べんてんの遷宮が行われました。農会では早朝から台座づくり、日暮れ前に新しい台座の上にお社を安置し、小田宮司がお祓いをしました。



大井元の若水汲み

吉凶池

三輪神社の山中に井水が湧き出し、扇形をした小さな水場がありました。場所は、大井元から五百ほど北方の丸山の西裾のところ。水面の直径は一・八ほど、どの円形をした清泉で、江戸時代はきれいな水が湧き出していました。寛政八年（一七九六）九月刊行の地誌・撰津名所図会下巻、卷三十九 有馬郡のところに

「吉凶池 三輪村ニアリ、伝へ云フ、三輪神社土ノ村民ニ吉凶ノ神託アル時、此ノ池ノ水巡リ動クト、車輪ノ如シ、ソノ巡リ動クノ左右ヲ見テ、ソノ年ノ豊凶ヲ知ルト云フ 甚ダ奇ナリ 他郷ニイマダ聞カズ」

とあり、古来、三輪神社の氏子に吉凶の神託ある時に、この池の水が車輪のように廻り動き、その左右に動くのを見て、その年の豊凶を占ったと伝えられています。古老によると水の回るのが右回りに動くとき、左回りに動くとき凶とされていたということです。当時、水は清く村人は神の水として飲用、稲作灌漑用水としていました。往時は数カ月間におよぶ旱魃でも

この井池の水は枯渇することはなかったといわれていますが、現在は枯れてしまつてその面影は残っていません。

大井元

三輪神社社務所から西百ほど丸山の麓に大井元の清水が湧いています。水面は長方形で、面積は約七坪（約二十三平方丈）ほどで、水質は清純でしかも水源がつかず、どのような旱魃や大雨のときにも水量が変わることがありませんでした。村人達はこれは三輪神社の神霊のお陰だといっていました。この水は三輪付近の集落の生活上必要な飲料水で、貴重な水源でした。大井元の水は、三輪神社の宮水といわれています。現在でも神職・総代会長の手によって元旦祭の神饌の一つとして「若水汲」の神事は厳かに守られています。

「三輪大明神縁起並寺社堂記」に「井中有一小石高僅可二尺伝称影降石」とあります。大井元の石祠の中に影降石があり北側石扉の裏に「三輪大明神」と陰刻

してあります。

明治以前は大井元に屋根はなく、露天でしたが、同二十四年頃から水を汲む人たちの寄付によって屋根ができ、水の管理も行われ、現在の姿になったといわれています。冬の寒期や夏の渇水期でもわき水は変わらず、昼間に区内の人たちが生活用水として汲み取っても、水がまわりの木杵からどんどん流れ出すくらい豊富な井泉です。遠方からも汲みに来る人がありましたが、桶に「三輪村」と焼き印した札をつけた人たちだけが利用できました。なかには許可を得て、この水を汲んで売り歩いている人もありました。

大正から昭和初期にかけて三輪小学校の児童は、この水を飲料水として使っていました。小使いさん（今の用務員）が毎日水汲み桶を担って大井元から学校まで運び、運動場備え付けの大きな瓶びんに入れていました。当時の子供達は皆この水を飲んで体力を鍛えました。

戦時中は疎開者など利用者が急が増え、一日に二荷しか汲んではいけないことになっていました。また、水量が少ないとき、他地区の人が夜間に水を汲みに来るので、夜番をしたこともあったということです。昭和十六年に水道が普及してから大井元の水も利用する人が少なくなってきました。関東大震災や今度の阪神大震災の時に水が少し濁りましたが、数日で復旧しました。現在この大井元は三輪区で管理をし、年一回の水替えや月一回の清掃などは六・七組の人たちで行っています。

3 来迎寺

来迎寺のお 来迎寺本堂の裏山に稲荷神社が祭ってあります。三輪区五組の人たちが中心になって毎年、初午はつうまの日の頃、稲荷さん このお稲荷さんで大祭が行われています。以前は初午の日が近づくと、五組の当番の人が稲荷へお参りして

護符をいただいていたのですが、最近はその習慣はなくなっています。初午の前には寄付等の餅米もちこめ五斗を蒸して、約二千個の餅をつけて準備をすすめます。



来迎寺の初午祭の餅まき

当日は朝から関係者が本堂、書院に祭られたお稲荷さんの前に順次参集。式場正面には、稲を背負った白衣老人の像が祭られ、その両脇には、酒、缶ビール、ミカンやお菓子などのお供が飾り付けられます。午前十一時頃、藤井住職が「般若心経」に続いて「理趣分経」をあげて五穀豊穡を祈り、続いて「回向文」で関係者の家内平穩、商売繁盛、交通安全、病氣平癒を祈願します。

五組には一班から四班まであり、地理的には旧の「地家」といわれるところで、三輪交差点の西本製材所付近から杉が丘住宅下付近までの県道両脇の約五十世帯。餅まきにはこの地域の約二百人が集まり、同寺の境内はほぼ満員になります。除災招福などのご祈祷がすむと、正午過ぎから境内で餅まきが行われます。お供え物も全部まかれますので、ひととき歓声が響きます。境内では年によって当番の人たちが焼きそば、おでんなどの奉仕をしたり、また、ある年には寺院内で関係者が

車座になって会食し、親睦を深めています。当日欠席した家庭には「火の用心」のお札と、お下がりの紅白の餅、スルメ、昆布等が配られます。

寺伝によると、曹洞宗開祖の道元禪師が中国で修行中に病気になるたとき、白衣の老人が現れて「われは日本の稲荷である」と告げ、霊薬を授け、その御蔭で道元禪師が快癒されたといわれています。その故事にならって、同宗の寺で守護神として白衣の老人を稲荷神とともに祭るところが多いそうです。

同寺のお稲荷さんの本尊は、豊川妙嚴寺（曹洞宗）のお寺に祭られている茶枳尼真天であるといわれています。裏山に祭つてある茶枳尼天はキツネに跨つたお姫さまの姿で、同寺にも稲を担った白衣の老人の像があり、鎮守稲荷大明神として、ともに祭られています。

いつ頃からこのような催しが続いているのか詳しい記録が残っていませんが、江戸時代の凶作の年に「地家」の人たちが五穀豊穡を折つて始めたのが、起こり

だといわれます。

お稲荷さんは稲を象徴する神で、稲生りからきたという説があるほど、農耕的性格を持っています。このお稲荷さんは三輪の山と里に往来示現する田の神であるといわれ、田を見下ろす、見晴らしのよい丘陵地に位置しています。田の神は春の農耕のときに山から下って田におり、秋の収穫のときに山に登って山の神となる信仰からきているといわれています。

その後、この行事は延々と受け継がれ、昭和五十年代ごろから周辺に家屋も増え、年々盛大に行われるようになりました。以前は初午の当日に行われていましたが、最近は学校や会社の休みの関係など、社会情勢の変化に伴って、初午か二の午に近い日曜日に行われています。

五十三年秋に五組の人たちや檀家の人たちによって、裏山の稲荷神社境内が改修されて参道も広くなりました。このとき稲荷社の屋根も新しく銅板が張られました。五十七年に本堂が再建されたとき、本堂横の部屋から裏山の稲荷神社が見通せるように設計され、初午の日の読経のときも本堂から稲荷神社が拝めるようになっていきます。

来迎寺の 来迎寺の年中行事は、一月には修正会 三月には稲荷、四月八日は釈尊降誕の花施餓鬼会があります。五月三年中行事 日は定例の吉祥講で檀家総会もかねて開かれ、このころには境内の一隅にあるボタンの花が色とりどりに咲き競います。このときに句会を開くなど利用者は寺内で静かなひとときを過ごします。八月九日のお盆の施餓鬼とともに参拝者が大勢訪れます。昔は境内で盆踊りがあり、出店でにぎわっていました。

秋には三輪老人会主催の三輪区老人会物故者の慰霊祭が行われます。また、このころ、三輪地区戦死病没者慰霊祭も行われ、三輪地区各宗寺院の住職による読経、遺族各種団体など多数の参拝者があります。このほか隣保の常会、法事、研修会や毎月第二日曜日には座禅会などにも利用され、第四日曜日には写経も催されています。

来迎寺の 曹洞宗となつてからの歴代祖師（四文字のうち上の二文字が和尚の称号、下の二文字が名前）は次の通りです。
歴代住職 平均在職年数は二十年、十一世元宣だけが五十年を越えています。

開山 哉安惠善大和尚

二世中興 楞宗智白大和尚

三世 賁海洞洲大和尚

四世 大光哲仙大和尚

五世 悟了俊禪大和尚

六世 一宗白英大和尚

七世 興山玉隆大和尚

八世 一透良寛大和尚

九世 清水天仙大和尚

十世 機外元峰大和尚

十一世 雲外元宣大和尚

同寺の墓地は、三輪村の共同墓地だったようで、三田青磁の陶工亀居貞次郎一族、内田久吉、久太郎一族の墓があります。また、日清戦争で戦死した山本力三郎、日露戦争の指尾友吉、第二次世界大戦の戦死者をはじめ、大正十三年の大水害で殉死した消防の谷市造、初代三輪小学校長、荻野鉄太郎らが眠っています。

民話「友さ 現在、三田ゴルフ場内の瓢箪池ひょうたんのそばに、「友之神社」が祭られています。毎年ゴルフ場や地元の関係者が集んぎつね」まってお祭りをしています。この地に次のような民話が残っています。

ある冬の寒い晩のこと、源六は母に連れられて近くの来迎寺へお説教を聞きに行きました。住職の講話が住んだ後、村の人々が世間話を始めました。

「瓢箪池のほとりに友さんギツネが住んでいるらしいよ」

「そのギツネはそこを通る人を騙だましたり、かわいい巡礼を脅かしたりして、みんなを困らせているそうなの」

この話を聞いた源六は、ある晩、母親にもわからないようにそと家を出ました。外は寒い風が吹いていました。源六は、十二、三歳の子供でしたが、一人でギツネ退治に出かけたのです。

その昔、上野の辻から成谷道を経て花山院へお参りする道は、両側に木々が生い茂り、昼間でも薄暗く気味の悪いところでした。月もない暗い夜中、源六は、旅に疲れた巡礼のまねをして、瓢箪池の堤に腰を下ろしてじっと待ちました。しばらくすると、風もないのに笹がざわざわと音をたてました。

「さては、友さんギツネが出てきたな」と源六の胸が高鳴りました。まもなく、たくましい男の人が現れて

「もしもし、巡礼さん、夜道で大変でしょう。わしもこれから小野の方へ帰るので、送ってあげよう」と親切に声をかけて寄ってきました。源六は、このときだ。とばかりにギツネのしっぽをしっかりと捕まえて放しませんでした。友さん

ギツネはとうとうギツネの正体を現して、

「これからは、決して人を騙したり、人のものを取ったりしませんから、どうか許してください」と謝りました。

一方、源六の母は、わが子がいないのに気づき、お寺で村人が話していた友さんギツネのことを思い出し

「源六がギツネを退治しに行ったのではないか」

と村人に相談しました。村人たちは、源六が一人で瓢箪池にギツネ退治に行ったかもしれないというので大騒ぎとなりました。半鐘を鳴らしたりして人を集めました。寒い夜中だというのに何十もの提灯が上野カ原を照らしながら探しました。

するとまもなくギツネのしっぽを高く振りかざしながら、得意そうに帰って来る源六に出会いました。源六の無事な姿を見て母親は胸をなで下ろしました。ふだん、腕白で村の評判があまりよくなかった源六でしたが、このことがあって以来、すっかり村の人気者になりました。

その後、尻尾しっぽをなくした友さんギツネは、どこへ行ったのか、それっきり出なくなったということでした。

4 伝統行事の伝承

御当行事 御当行事は、三輪区内に住む十歳の児童が、氏子入りをするときの神事です。御当の代表者は、昔は「頭人」と呼ばれ、神事のすべてを担当していました。一年ごとに交替するので当番とか、当親とか当人とも呼ばれま

した。当親格に選ばれるために厳しい条件が設定されると、次第に受け手がなくなってしまう。そこで、神事や村世話は故事に明るい長老が取り仕切り、その他の雑事は若者が担当するようになり、精進頭、精進代とか呼ばれるようになりました。

当番の子供が神への直接の奉仕者、稚児として選ばれ、毎年一月十日の早朝に神前で御当の指名の奉告祭に参列し、昔はその後一年間、指名にあうよう毎朝夕お参りしていました。一年間の奉仕の末、一定の条件に合ったとして村人に祝福され



御当行事報告祭に参拝する児童たち

て氏子入りをするのです。その後、朝夕のお参りは一週間に短縮され、現在ではそれがさらに三日間だけになっています。

戦前には今の三田市役所付近に御当田がありました。一月九日には、区内の老若男女全員が公会堂に集まり、その田で収穫した米で昼食が振舞われ、その接待は当親が担当していました。当日、公会堂の入り口には当親が金屏風の前に羽織袴姿で正座して区民を迎えました。この日は、ご飯は大椀、みそ汁、大根のなますなどのほか酒は飲み放題だったということです。また、三輪小学校に通っていた区内の児童たちは昼休みになると公会堂にかけつけ、食事をしたあと学校へ戻って行ったといえます。この風習は戦時中に供出米の出荷が厳しくなるまで続き、食糧難の頃に姿を消しました。

現在では、一月十日の午前六時二十分頃に区内の小学校三年生の男女とその親が、社務所前に集合し、手水で清めたあと、宮司を先頭に区長、総代会長、当親が続いて児童とその親が静かに石段をのほります。御当指名の奉告祭では、拝殿に上がって太鼓の音、雅楽が流れる中、同三十分頃に宮司が神前で祝詞を上げ、区長、総代会長、当親に続いて児童達が次々と「誓いの玉串」を捧げます。その後の神事は、中日の十五日、終わりの日の十七日の三日間、早朝にお参りをします。

当親など役員は略礼服で、保護者と子供は平服ですが、拝殿ではジャンパー、オーバーは脱ぎます。厳寒期の早朝で凍つくような風が吹き込み、床も冷たくて足もしびれるなか、約三十分間厳しい試練に耐えます。翌年の一月九日の早朝に神社拝殿に再び御当の親子が集まり、御当渡し神事を行い、すべての行事が終わって一人前の氏子入りを果たしたことになります。このとき区長より各人に御当の記念品が贈られます。

親睦行事としては、それぞれの年によっては異なりますが、学校の夏休み中に神戸農業公園へ行ったり、陶芸の小物作り、

神社境内で記念植樹、小柿青少年野外活動センターで飯ごう炊さんをしています。

波宇也踊り

毎年十月十日の秋祭りの夜七時三十分から、神社拝殿で「波宇也（ハウヤ）踊り」が奉納されます。この踊りは、田楽衆が鼓と古楽器を持って約二十分間、上下、左右、前後に飛び舞い、「ほーほー」とかけ声をかけるなど、古典的な素朴な踊りです。

地元伝わる一説に、その昔、徒党を組んだ賊徒が、この地方の神社や寺院などを荒らし回って、地元の人たちから恐れられていました。あるときその賊徒が三輪神社の宝物を盗もうとして神殿の扉を開けたところ、大きな白い蛇が口をあけて飛びかかろうとしました。驚いた賊徒はほうほうの態で逃げ去り、その後、出没しなくなりました。村人が賊徒の退散を歓迎し、その喜びを踊りで表現して踊ったのが、この踊りの初めであるとされています。

ハウヤ踊りの由来などを書いた資料は残っていませんが、踊りの仕方については代々口承で伝わっています。記録としては、踊りのときに使われる縮太鼓、ピンササラなどを納めた道具箱の裏蓋に「文政八年（一八二五）に波宇也党で箱を作り替えた」と墨書したものが残っています。

奉納する当日、田楽衆（波宇也党）の六人は、社務所で紋付き、麻袴、折れ烏帽子に装束を整えます。奉納のときに使う縮太鼓二つとピンササラ四つと白扇一本を持ち、神官とともに、石段を登り、拝殿に進みます。

神前へのお供えは、赤ズイキイモ（小芋）の根の部分に生栗を楊枝で指した「高盛お供え」と、餅、昆布、初穂、白蒸のほかマツタケや鯛などです。

拝殿では縮太鼓の二人が本殿に向かって左右に分かれ、ピンササラ役の四人も両側に分かれて座ります。午後七時三十分から神官の修祓、祝詞奏上など神事が行われ、それが終わると、田楽衆は向かい合うように座り直し、田楽を奉納します。

まず、本殿に向かって左の縮太鼓役（最年長）が左手に太鼓の紐を持ち、右手にバチを持って、トントンと単調なりズムで太鼓を叩きながら立ちます。太鼓に合わせて右足から三歩、四歩目は身体を本殿正面に向け両足を揃えて右に横跳びをします。



波宇也踊りを舞う波宇也党の人たち

次にそのまま正面を向いて左に横跳びを三回し、元の位置に戻ります。これを三回繰り返します。三回目に元に戻ったところで同じ列のピンササラ役が両手でもって鳴らしながら立ち、同じ動作を三人で三回繰り返し着席します。それが終わると、右列の締太鼓が前へ進み、先ほどと同じ動作を行い、ピンササラ役も同様に従います。

両側の奉納が終わると、全員が太鼓、ササラを鳴らしながら右回りに輪になって回り始めます。左列の締太鼓から「ホイ、ホイ」と声をかけ、順次同様に声をかけます。三周したところで元の自分の席に戻ります。今度は右列の締太鼓から全員で三周するまで同じ所作を繰り返します。さらにもう一度左列の締太鼓から同様に繰り返します。

次に「蛙飛び」となります。まず、左列の締太鼓が中央下座に移動し、一礼の後、白扇を広げて右手に持って立ち、両手を胸の高さで合わせます。そのままの高さで左右に三回広げ、身体の正面に戻すと両足を揃えたまま左前方に一步、右に一步、左後方に一步飛んで、元に戻ります。これを三回繰り返すと左手を下ろし、右手を頭上に真っすぐ上げ、扇を伏せるようにして下ろしながら、「ホイ」と一声かけます。そして扇を納めて一礼し元に戻ります。これを右列締太鼓、そして左右のピンササラ役が交互に六人全員で行います。昔はもつと長かったようですが、近年は略式になったといわれます。

踊りが終了すると、拝殿左横にある境内末社天満社前に並び、太鼓、ササラを短く打ち鳴らし一礼して終わります。この舞が終わらないと秋祭りを締めくくる神楽は舞わないしきりになっています。

踊り手はハウヤ党の六人衆によって代々勤めてきました。これらの人は三輪神社をとりまいた位置に住んでいます。この神事は、三輪村（地家）十七軒の農家のうち、六軒の世襲制で伝統行事が維持されて行われてきたといわれます。一説に大

和国・大神神社から祭神が勧請かんじゆされたときに、一緒に来た人々の子孫だと伝えられています。明治維新後、六軒のうち二軒が転出したため、入れ替わりがあり、うち一軒は区長がつとめるようになっていきます。

この波宇也党の六人衆は、波宇也踊りだけの役付けで、神社の運営に関わることはありません。波宇也踊りは平成九年九月に市指定重要文化財（無形民俗文化財）に指定されました。

三輪神楽

三輪神楽は、「尾張の雄獅子」「三輪のシシマイ」として親しまれ、昭和三十年頃まで三輪青年会で仕切っていました。当時、四つの獅子頭があり、祭りの宵宮には、成谷、上野、町、地家など四方向に分かれ、氏子の家を一軒づつ回ってお祓いをし、祝儀によって舞の種類も替わっていました。

現在では、神楽保存会の人たちによって継承されています。夏祭りや秋祭りに欠くことができないもので、氏子の五穀豊穡、家内安全、厄払いなどの願いを込めて舞われます。この神楽は八種類の舞で構成され、それぞれの舞の状況と意味するものは次の通りです。

- 一、荒神祓あらいい 御幣と鈴で家内安全、厄払いをします
- 二、剣の舞 獅子が刀の鞘さやを口にくわえ、前後に悪魔を切り捨て、厄払いをします
- 三、刀の舞 人々の厄を斬り払い、幸を祈る刀の舞です
- 四、振るい獅子 犬がそばえるような動作で、リズムカルに獅子が舞います
- 五、天狗獅子 獅子が踊り疲れて寝るところを天狗に起こされ、あやつられます
- 六、牡丹獅子 家門の繁栄を意味する舞です
- 七、人形獅子 天狗、ひよっとこ（横向き）、お多福おたふくが滑稽こっけいな動作をしながら獅子に絡み合っ舞います
- 八、神来舞 五穀豊穡ごこくじゆんじやくを祈願して舞います

この中で、天狗獅子のときの獅子の寝る動作、また、神来舞は重厚で厳かで素朴な舞が見ものです。秋祭りで、全部の舞が終わるのは午後十時頃になります。

正遷宮祭

三輪神社では、二十五年を式年として正遷宮が行われてきました。この神事は、神社の本殿の造営、修理に際して、御神体を選ずるときに執り行われます。まず、本殿から権殿に移すのを仮殿遷宮、または仮遷宮といい、修理が完成したときに権殿から本殿にまた御魂をもどすことを正遷宮といっています。この神事は宮司と氏子総代によって深夜に執り行われます。三輪神社の正遷宮は、江戸時代にも行われていたようですが、記録として把握できるのは、明治三十三年（一九〇〇）五月三―五日の三日間に行われた以降のものです。

この正遷宮は、式年の年数や規模こそ違え、元は伊勢神宮の式年遷宮をまねて始まったものではないかといわれています。伊勢では二十年ごとに神宮を全部建て替えますが、地方の中核神社では二十五年ごとに部分修理をするところが多いようです。

通常の祭礼は宮司と氏子総代とが中心になって執り行いますが、正遷宮のような大きな祭りになると、この他に氏子内から正遷宮協賛委員が数名加わって運営します。三輪神社の氏子の範囲は三輪区、成谷区、縄手区、一番区、二番区の合計五区。氏子総代数は十八名で構成されています。氏子総代は、特定の株を持っているとか、特定の家で代々世襲というのではなく、各区で選挙や推薦によって選出された人たちによって構成されています。任期は三輪神社規則で三年と決められています。三輪区では三輪神社の石鳥居を境にして「地家」と「町」からそれぞれ五名ずつ氏子総代を選出しています。その他の区では二名ずつとなっています。

▽正遷宮の費用　正遷宮には莫大な経費がかかります。事業費は氏子たちの寄付によってまかなわれます。これらほかもに神社本殿などの修理と、正遷宮祭の三日間に行われる行事の必要経費に使われます。この祝賀行事のことを地元の人たちは「賑やかし」と呼んでいます。

この賑やかしというのは、幟差しや屋台、地車、砂持ちなどで、神社にお祝いに行くことの総称です。秋祭りに巡行する曳き壇尻に色々と飾りをつけ、屋台は前にお囃子を乗せ、後ろには特設の舞台を作ってみんなで引張って行きます。その舞台の上で「にわか」や「餅の曲搦き」が行われています。また、砂持ちは幼稚園までの男女児によって行われます。これ

はもともと神社境内へ砂を運ぶ地均しの一役でしたが、現在は幼児によって形式的に行われています。総事業費の内、社殿の修理費より、賑やかしの費用の方が多くかかる年もあったそうです。

▽正遷宮の日程　正遷宮は、おおむね四月中旬の三日間に行われます。これは一年中で一番気候も穏やかで、農家も比較的忙しくない時期に当たするため、このような日取りが選ばれます。日取りを決めるとき、何より農家のことが考慮されるのは、昔は農家を中心とした氏子が多かったため、今でもその伝統が続いているということです。近年では三日間のうちに必ず日曜日を入れ、より多くの人々にこの正遷宮を祝ってもらっています。

初日は式典が催され、第二日目は招待した近在の集落による「賑やかし」があり、最終日は地元の氏子による賑やかしが行われます。この賑やかしは神社境内周辺の混乱を避けるため、それぞれ時間を決めて奉納されます。賑差しはいわば賑やかしの華ともいわれています。

賑差し神事

賑差し神事というのは、三田地方で二十五年に一度の正遷宮の改修が終わった神社へ、近在の集落(区)から祝意を表して賑を奉納する民俗行事のことをいいます。最近では市内の特別行事や市外のイベントなどにも賑差しが参加しています。この行事は江戸時代に始まったといわれており、三輪区のほか、高次、山田、桑原、川除、北区、南区、貴志、上下深田、池尻などでも賑差しが保存継承されています。

行事は集落によっても違いますが、三輪区では子供たちの手拭い賑に続いて、長さ十寸近くもある竿に賑をつけた若者の列が、パレードの形で練り歩く勇壮なものです。奉納の道中で賑をたすきに取ったり、梯子の上で賑を差したり鳥居越をします。囃子を受け持つ大太鼓、鐘などに特別の飾り付けを行い、行事を一段と盛り上げています。この賑は直径約五寸、長さ十寸近くもある青竹に、一反の木綿を三、五本取り付けたもので、その本数によって三反賑とか五反賑と呼ばれています。一反というのは大人一人前の衣料に相当する布帛で、普通並幅で鯨尺二丈六尺、二丈八尺(約八・五寸)の長さがあります。各集落からこの賑が数本献納されますが、奉納するにはかなりの費用と練習の積み重ねが必要です。

もともとこの賑は、近在の集落が正遷宮を祝って、神社で使う必要な鈴や幕などを奉納した品の一つでした。それがいつ

の頃からか、農村地域の氏子たちが「単に生地を奉納するだけでなしに織に仕上げ、それを差しこよう」ということになったようです。そして次第に一つの行列を作って織を差して奉納するようになり、「織差し」という名称で今に伝えられています。これは商人を中心とした町方が屋台や地車に奉納物を載せてお祝いに行く方法に対して、農家を中心とした農村地域から勇壮で力に満ちたお祝いの方法だといわれています。

▽しめ飾り結びと織の竿　正遷宮の日程が決まると、区内に特別委員会が設けられます。織差しの技は基本的なものだけでも大変難しく、また、毎年奉納するものでもないので、一カ月近い練習が必要です。委員会では区からの協力依頼を受けたときから、準備にかかります。

囃子の太竹や織差しの竿は、農会の人たちが竹藪で手頃な太さの竹を見つけて、根元から掘り起こしてきて、その根元を「ちよんな」で丸くして、節と共に紙ヤスリで磨き、つるつるになるように仕上げます。これは差し手が竹の節などの突起によって怪我をしないようにするためです。その後、竿の重量を軽くするため「油抜き」を行います。三輪公園で藁をくすべて竹をあぶり、出てきた竹の汁を布で素早く拭き取ります。

奉納する織は、婦人会の人たちによって作られます。まず、練習用の織は、前回使用した織を持ち出してアイロンをあて、いつからでも練習できるように備えます。本番に使う織は、約二カ月前に婦人会員十人ほどが二日ばかりで縫い上げます。三輪区ではほとんど五反織を奉納しますので、五色の織を三本作ります。色は竿に近いところから白、桃、黄、青、赤の順となっています。一反（幅三十六・五寸、長さ約十尺）の布から子供用の手拭織や竿に取り付ける乳等を取るため、一本の織の長さは七・八七寸となります。まず採寸をして風穴の位置などまち針を打って決め、ミシン三台を使って五色の布を縫い合わせます。風穴は織に受ける風の抵抗を少なくするためのもので、一本の織に二十数カ所あけてあります。最後に竿と織をつなぐ乳の部分に赤糸の飾り糸を付けて仕上げます。

囃子は、直径二十寸ほどの竹に大太鼓、小太鼓、釣り鐘の順序で吊り下げます。とくに大太鼓をぶら下げるために藁を三つ編みにして、それを太鼓の回りに巻いて固定します。この藁の編み方を「三つ編み」と呼んでいます。この大竹に前後二

本の竹を交差させ、大勢の人々によって担えるようにします。そのとき交差したところは、やはり藁を三つ編みにしたもので固定します。そして、大太鼓、小太鼓の上には藁によって飾りがつけられます。この飾りは三、五束の藁を一つにして、縄で巻いて作られます。

この大竹の一番前のところに「祝正遷宮、奉納五色幟二本、三輪区」と奉納物を書いた木札をつけます。幟を奉納した後にしめ飾りから木札はずし、奉納物の目録として神社に供えます。

▽幟差しの技の練習 幟差しの練習は奉納日の一カ月前頃から始めます。神社の境内に投光器が数基取り付けられ、土曜日の夜八時から十時頃まで先輩からみっちり仕込まれます。指導者は前回の正遷宮祭のときに現役の青年団員として、幟差しを経験した三、四人が担当します。幟差しの作法には色々なものがありますが、まず基本的なものをあげると、

① 約十斤の幟を両手で持ちます。左手が上の場合、目の位置付近で竿を支え、右手は逆手で竿の一番根元を持ち、腰の位置付近で支えます。

② 次ぎに右手だけで竿を持ち上げ、肩越しに後に滑らせます。このとき素早く左手を後ろに回して、落ちてくる竿の根もとを持ちます。右手はそのまま竿を支えます。

③ 竿を再び前に持つてきます。このときは右手が上で左手が竿の根元を支えている格好になります。そしてまた同じことを繰り返して前進します。

この基本的な技の外に「地這いの幟」、「背越し梯子」、「二段梯子」などと呼ばれるものもあります。

初日から一週間ほどは、普通に幟を差す練習ばかりです。幟を差す際には必ず幟の一番先を凝視してバランスをとり、幟を倒さないように教えられます。

一週間目になると、幟の重さになれるため、水に濡らした筵を三枚竿につけて練習をします。指導者は「これが普通に差せるぐらいになったら一人前や」といって若者を励まします。この幟はかなり重くて、容易に差せるものではありません。約二十人の若衆達は何回差せるか回数の競争をし合って練習に励みます。この頃になって一応、普通に差せるようになります。

す。

十日目ぐらいから、回転を伴う技の練習です。回転技には前方、後方回転の二つの技があります。どちらも回転をするときには幟を片手で支えて、幟を地面につけないようになるまで練習をします。最初は地面に筵を敷いて練習をし、その後は石畳の上で回転の練習をします。

二週間目にはいると、三輪小学校校庭など神社近くの広場で練習をします。これは神社の境内は、大きな杉の木に囲まれていて、あまり風があたりたくないため、風の強いところでも差せるようにということです。今までの成果を発揮しながら、風の強い広場で三日間、練習を繰り返し、再び神社へ戻って練習をします。このとき風の吹いてくる方向に幟を少し倒して差すコツなどを教えてもらいます。

後半には、一番難しい梯子を使った技の練習に入ります。これは十畳近くもある梯子を立てて、その上で幟を差します。幟は相当な重量があり、不安定な形で幟を差すのは危険ともなうので、それだけに慎重に練習が続けられます。梯子の上で差し終わると下で待っている差し手に幟を落とします。下で待っている人がそれをうまく受けて差し続けるのです。石鳥居の上を越す幟は、幟差し一番のハイライトとされています。

平地では一人の幟差しは五、六分間ほどで交替しますが、このとき幟を渡す作法があります。それは昔の大名行列で毛槍けいやりのやりとりのように、数畳離れた相手に投げて渡します。それだけでなく、時には後ろの相手に投げて渡すこともあります。渡された人はそれをうまく片手で受けてすぐに差すのです。この技も幟差しの基本的なものの一つです。

昔から「幟を奉納する途中では、幟を絶対地面につけないように」と言い継がれています。神社へ奉納する幟は神聖なものと考えられ、お祝いに持って行く幟を汚れた地面につけないという配慮からでしょう。また、神社近くでは石鳥居の上を越すことになっていますが、このとき神聖な鳥居に梯子を絶対触れないようにして越さなければなりません。鳥居の下を通ると幟を倒して行くこととなります。どちらも昔の人が縁起をかついだのが、幟差しの特異技の一つとして受け継がれているようです。一カ月にわたる厳しい練習を積み重ねて、やっと本番で無事に演じ終えるようになるのです。

▽奉納の編成

幟差しを神社に奉納するときは、次の順序で行列を組んでお祝いに行きます。

① 小幟（手拭い幟） 六～七名の子供たちが、笹に手拭いをぶら下げた小さな幟を二～三本差しながら奉納します。本幟の露払いともいわれています。

② 本幟 集落によって三反（白、青、赤の三色）、もしくは五反（白、青、赤、黄、桃の五色）幟を二～三本奉納します。一つの幟に五名程度の差し手がついています。本幟は現在ではほとんど三～五色の幟となっています。これは祝いに色を添えるという意味だといわれています。

③ 囃子方 大きな太い竹に太太鼓、小太鼓、釣り鐘をつけ、それを大勢の人たちが担って行列を組みます。鐘、太鼓を鳴らし、それに横笛約十名と三味線数名とによって、「幟差しの音頭」が囃され、音頭取り三～四名により音頭が歌われます。

三輪神社の道中歌は、その歌の文句から「伊勢音頭」と呼んでいます。幟差しを奉納に行くときには、伊勢音頭の文句や節を替えたものを歌い、帰りには本調・伊勢音頭を歌って帰ってきます。そのために行きの歌を「吉田音頭」と呼び、帰りの「伊勢音頭」と区別しています。「吉田音頭」の文句は次の通りですが、その時々によって自由に祝詞を入れた祝い歌を作っています。

吉田ナアー 通ればアー ヨーイセー コオリヤセー

二階かアアア 招エく ヨーイセー コオリヤセー

しかもナー 鹿の子の オノソーレエワサ

振り袖で ソレ ササヤートコヤ セエイノヨーイヤナー

アレワノサツサ コレワノサツサ サアサ ナーンデモセーエー（片仮名の部分は合いの手、以下略）

めでためてたで おさまる御代は 吉田御殿も 花吹雪
めでためてたで おさまりしやんす 処葵の 吉田姫
桜道中の 御神酒に酔うて 打ち掛け吉田の 飯の夢
旅の御駕籠の 足取りせかせ ポンポリ吉田の 顔はてる
めでためてたの 若松様よ 枝も栄えりや 葉も繁る
めでためてたが 三つ重なりて 鶴が御門に 果をかける
鶴が御門に 果をかけたなら 亀は御庭で 舞を舞う
今年しや豊年 穂に穂が咲いて 道の小草に 米がなる
見えた見えたよ 松原越しに ゆかた姿の 幟差し

めでためてたで 練り込む幟 卯月の空に 人の波
梅の香りの 社の神に 心こめたる 幟差し
三輪の若人 心をこめて 祝い納さむる 今日の日
今日よき日に 幟をさして 納めおきます 神の前
御用は納まり 願いごとかのうた こんな嬉しい ことはない

④ 控えの人々 幟差しの色々な技に必要な道具を持つ人や、集落(区)の役員たちによって形成されます。なかには小幟の前に神幸式で猿田彦の衣装を付けた人が、櫛を左右に振ってお祓いしながら、幟差しの行列を先導することもあります。この幟差しの行列を正遷宮の主催側が町村境まで迎えに行つて途中で休憩をしてもらい、決められた時間に神社に奉納してもらうことになっています。

▽伝統の継承　かつて「地家」の「祭礼講」と「町」の「神楽講」が神楽を奉納する役目があり、職差しなどの技もこれらの若い衆によって継承され、今に伝わってきました。先輩たちが祭礼に参加して色々の奉仕をし、技を伝承しように、現在も同世代の若衆がやはり中心になって、懸命に色々な技を受け継ぎ、さらに後世に伝承していく努力を続けています。

5　むすびにかえて

古代から三輪神社を中心に開けてきた三輪区は、明治維新以降の村合併、阪鶴鉄道、神有電車の開通や交通網の発達、戦中・戦後の混乱期を経て大きく変わってまいりました。とくに三田市役所庁舎が建設された頃から大きく変化しはじめ、大手企業、都市銀行、農協などが次々と三輪区内に進出、市内で最も官公庁、事業所が集まった区となっています。その背景として三輪区は公共交通機関に近いこと、市庁舎の誘致に成功したこと、商店街の後背部に広い田地が拡がり、開発の余地があったことなど、恵まれた諸条件があげられます。

これまで三輪区内の先人たちが伝統文化を守り、幾多の危機を乗り越えて、区有財産を守ってこられたその恩恵を、現在の区民が享受しているわけです。これを次世代、未来の区民に引き継ぐことが現在の区民に与えられた課題でもあります。

さしずめ三輪区では二十一世紀に向けて三輪神社公園の整備、上野旧道の拡幅、国道一七六号線の騒音と振動問題、区民の憩いの場・活動の場である三輪会館の改築など数多くの課題を抱えています。

このうち、「三輪公園」の整備については少しずつではありますが、具体化してきています。同公園については昭和三十年に中央公園を区民の奉仕作業で整備したのをはじめ、平成八年には東公園が完成し、十年度には西公園の造成を予定しています。現在、区民が交替で公園の下草刈り、清掃等の現状維持をしながら、区民の憩いの場として利用する一方、市や関係機関にも呼びかけて、さらにすばらしい公園の実現に向けて努力を重ねています。

具体的には三輪公園の整備については、平成三年六月に塔下真次市長に「同公園を市の管理公園として整備していただきたい」と陳情書を提出し、その後も市と折衝を続けています。また、平成九年七月には、日本ケーブルシステム社長に「貴社が所有されている三輪神社隣接の土地を活用させていただきたい」と要望書を出しています。この地は老人会がゲートボール場に使用している付近で同社が社宅、寮を作ろうとしましたが、計画が中断されたところですが、現在同社では市へ用地の売却について同意されており、市もできれば十一年度に用地買収、十二年度に事業設計、十三年度に公園化を図る計画を検討中で、どちらも前向きに進められています。

三輪区内には氏神の山にすばらしい「鎮守の森」が残っています。今後とも三輪神社と調整をとりながら、神域の部分はそのまま残し、三輪山全体の公園化と、三輪山の周辺に遊歩道を設け、区民の健康と憩いの場にする計画を立てています。

また、この地には三田青磁窯跡等の史跡があります。神社の森を大事にしながら、「三田青磁史跡公園」としての整備を希望しています。焼き物を作る試験工房を設け、三田青磁の歴史的、文化的な保護、伝承、史実に基づいて研究会も開ける場も設けて三輪のまちおこしにしたいと要望しています。全体計画としては既設の城山「スポーツ健康広場」と結び、「憩いの広場」として三田の新名所として次代への贈物としたいとしています。

これらの構想が実現しますと、三輪山の春夏秋冬の移り変わりも楽しめ、三輪区民だけでなく三田市民、阪神間の人々にも、三輪の憩いの森としてやすらぎと活力を受けることができるようになります。

一方、区民の活発な地域活動で三輪会館も狭くなっていますが、会館の改築については、三輪公園の進捗状況しんぱくじょうきょくをみながら区民の合意の上で、総合的に改築時期を進めることにしています。